

グルマーイ・チッドヴィラーサーナンダについての熟考

グルマーイの直接の導き

キャスリン・ダウニング

インドにあるシッダ・ヨーガ・アーシュラムのグルデーヴ・シッダ・ピートゥは、この上なく神聖な場所です。そこはグルのシャクティと愛の玉座であり、美しさと調和のオアシスです。私は、2005年から2006年にかけてのグルマーイの教えの旅を支えるスタッフの一員として、グルデーヴ・シッダ・ピートゥを訪れる幸運に恵まれました。中庭の静寂、ダクシン・カシの広がり、テンプルでの夕方のアーラティー、星のきらめく夜空といったグルデーヴ・シッダ・ピートゥのすべてが宝物のように思えました。

ところが、5カ月にわたる滞在の最後の数週間となった頃、荘厳で静かで力みなぎるアーシュラムという愛の大海の中にいながら、私の心の内に目に見えない壁が突然現れ、自分自身の心から切り離されたように感じたのです。アーシュラムのリズムや流れから外れてしまったようでした。実際、いつも時と場所を間違えて、間違ったことを言っているように思えました。自分の心ともう一度つながろうとすればするほど、手が届かなくなってしまうようでした。

教えの旅が終わりに近づくと、スタッフが一人また一人と出立し始めました。私が出立する日の午後、中庭で行われたグルマーイのダルシャンに招かれました。グルマーイがグルデーヴ・シッダ・ピートゥでの滞在はどうだったかと尋ねたので、私は感謝の気持ちを伝えました。グルマーイは質問を重ね、私の感謝の気持ちはますます引き出されていきました。私は、グルマーイが私のより高い自己に呼び掛けているように感じました——グルマーイがいつも私の内面に見ているのはこれなのです——そしてそれは、当時感じていた苦悩に向き合う強さを私は持っているという確信をもたらすものでした。

それから、グルマーイは私に導きを与えました。彼女は、建物の細部や織物の柄などの細部に注意を向ける練習が役に立つでしょうと言いました。そして、気をつけて帰るようと言いました。

その導きに戸惑いを覚えましたが、それを受け取ってとても幸せした。グルマーイの言葉の重みも、グルマーイの直接の導きを受け取ることはたいそうな祝福であることも、私は知っていました。この導きに従えば、必ず結果がついて来るだろうと分かりました。

私はすぐに実行に移しました。アーシュラムのあちらこちらを歩いてすべての神聖な場所に別れを告げながら、私は細部に注意を払いました——ガネーシャ神のムールティの曲線を描く鼻、石畳の小道の模様、マンダップの柱の上部の彩色された図柄。

シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムに帰った後も、私は毎日定期的に立ち止まり、周りにある模様や細部に注目しました。椅子のクッションのカバー生地 of 織り方、机の木目、パソコンのキーボードの曲線的な形などに注意を向けました。それと同時に、内面で起こっていることにも意識を向けました。

数週間たつと、細部に注目する練習が以前より自然にできるようになっていることに気づきました。かつて自分のことばかり考える悪循環に陥り、心の美しいエネルギーから分離していることに気を取られていた私のマインドは、穏やかになりました。私はまた、何か他のことが起こりかけていることにも気づきました。私のマインドは周りの世界への観察に鋭敏になり、感受性も強くなりました。枝から枝へと飛ぶコマドリを見て、自然の持つ快活さに楽しい気持ちになりました。鉄製の手すりの線細工を見て、その優しくて強い性質を称賛しました。赤く丸くつるつるとしたりんごは完璧だとほれぼれとしました。

私の内側に存在するものと周囲の世界に存在するものにはつながりがあることに、私は気づきました。そのことで、私はより意識的で、その瞬間にいるようになり、内側と外側の両方に常に広がる優美な同一性を感じるようになりました。この新しい認識は私の瞑想を後押しし、そして私の瞑想はこの新しい発見を後押ししました。自然や建築物に見つけた性質——快活さ、強さ、完璧さなど——が私の中にも存在するを感じ始めました。グルマーイの教えに従い、建物や織物の細部に意識を向ける練習をしたことで、見る目が養われました。その結果は素晴らしく、視野が広がり、私は心の美しいエネルギーと再びつながることができたのです。

グルマーイが私に与えた深遠な贈り物は、私という存在の最も深いレベルに触れ、それを変容させました。今この変容を振り返ると、グルマーイは私に、グルマーイが教える『シヴァ・スートラ』からの格言——ヤター・タトラ・タターニャトラ、「ここにあるごとく、どこにでもある」——を実践する黄金の機会を与えてくれたのだと分かります。

